

報



會

會 岳 山 本 日

109

月 九 年 六 十 和 昭

登山と探險

周 布 光 兼

此の前の「山岳」に望月達夫氏がミヤゴンカ山群の事を書かれ、將來日本が遠征隊を送るべき處として支那奥地に着目すべき事を言及して居られた。又、四谷龍胤氏などは盛に登山と國家とを結びつけられて、遠征も大東亞建設の一翼たるべきものを行ふべきであると主張して居られたが、今や全く其の通りにならざるを得ない、と言ふよりは、さうなつてこそ吾々の遠征の使命は果されるものと云ふ考へ方が段々に一般的なものとなつて來た様だ。此の動機は勿論歴史的な國家發展が現在の様な時期に達した爲であると云ふ事を置いては決して考へられないだらう。つまり周知の如く、もう國家と云ふ觀念を離れては縱令人類に對しても忠實であり得ないのであつて、換言すれば、若しも人類に忠實ならんとすれば國家を通して行はねばならないと云ふ時期の只中に吾々は生きて居ると云ふ事になるわけだ。

さてそんなわけで少し探險と云ふ事を述べて見たい。簡単に言へば、探險は土地を對象とせねば行ひ得ないもので、それもはや日本内地などでは行ひ得ないものだから、大東亞建設に邁進せんとする吾國にとつて探險が必要なる事はおぼろげながら解るであらう。處が次に探險の意義を述べねばならぬが、數多き過去の世界の探險隊の歴史を見ても、漸時科學的な目的と組織と準備による様になつて來て居るので段々に冒險を敢てる様なものではなく、むしろ合理的に可及的に危険を避けて目的を遂行する様になつて來て居る。だから現在探險は冒險なりとは斷じ得ない事となつた。尤も之は探險家が冒險心を持たないと言ふ事ではなく、却つて例へば登山に於てしばしば經驗する如き冒險心が探險の動機の一つの根本的なものかと思ふが、要するに冒險せん爲の探險でなくて理性的な何等かの目的遂行の爲の探險なのである。

だあまり人の入つた事のない土地へ自らが入り込んで行つて自分の手で其の土地を後々の者の爲に開拓せんとする氣持である。此の氣持が湧き上つてこそ最も探險家的な者たり得るのであり、斯る旺盛な氣概を抱いた人々によつて眞先に地域が擴大されて行つてこそ探險の意義も國家に通ずるのである。

かう考へて來ると探險の目的地たるべき所は少くとも既に吾々の文化の及んだ地帯では有り得ない。吾々にとつて新しい、而も多くは未開、半開の奥地や邊境地帯が最も對象となるべきものである。

さうすると又必然的に氣慨だけで片が附く問題でもなくなる。つまり對象地域がそんな所ならばどうしたつて色々と通過其のものに附隨する色々な技術を必要とするものであるから。勿論其の技術の中には色々な事項が含まれる。將に地域的な特殊事情、例へばジャングル、沙漠、南極等の如き寒帯、等は夫々異なる準備と技術とを要するものだから、之等の必要に應じて吾々は巧に進み得ねばならなくなる。處が此處に要求される根本的共通的なものは吾々が山で學んだ本質と非常に一致するものである。山で學び得る色々な事項を今

目 次

一々數へ上げる事は出来ないが、其の一つとして、都會を離れ人跡稀な所に居ても吾々山に行つて居た者は普通の人よりも淋しきを感じ

- ・登山と探險……………一
- ・富士の雷……………二
- ・木曾御嶽の「種蒔爺さん」……………三
- ・長白山路査隊參加記……………五
- ・指導……………五
- ・橋本三八……………六
- ・僕と歩行術(關西支部編)……………八
- ・嶺恩平……………八
- ・山の名山の地名(七)……………八
- ・白馬……………二〇
- ・北佐渡山脈縱走報告……………二〇
- ・川崎隆章……………二二
- ・會員一千名突破に就て……………二三
- ・谷川岳避難小屋竣工……………二四
- ・圖書紹介……………二四
- ・會員の聲……………二六
- ・會員田口一郎氏……………二七
- ・會務報告……………二七

じないと言ふ事實である。時には大自然の只中に立てば立つ程吾々は嬉しくなるかも知れない。そして此の事實は探險家にとつて不可

必要な要素である。斯く考へ来ると、登山家は探險家たり得る素質を益々持つて居ると云へるだらう。

但し之を以て登山家は直接探險が出来ると思つてはならないだらう。探險はそんな甘いものでは決してない。探險はもつと複雑である。吾々は唯、彼處に行き度い此所に行き度いと云ふ工合には決して動き得ないであらう。探險は今や総合的な研究目的を持ち、其の準備も亦完全な科学的なものである事を要求されて居るのだから、従つて第一資金も莫大なものが要求されるし、目的も必要且つ堅實なものでなければならず、それだけに諸方面との連絡も必要となり、全く一の事業の如き形態を持つものとなる。斯く事業の如き形態を持つものとなれば、出来得べくんば組織的機關の建設が必要となるわけであつて、だから單に今まで行つて来た様な登山の遠征の様な気軽なつもりで出掛けようとしても中々さうは行かないのではないかと私は思つて居る。

だがさうかと言つて前述の様に登山家は本質的には探險家たり得べき素質に恵まれて居るのだから吾々が若しも探險に意義を感じたならば、登山家が協力して進む事は非常に有利に展開する原因となるだらうと思ふのである。

の研究機關を必要とする程なのだから、登山界と密接な關係は保たねばならないが組織としては別のものでした方が結局便利だと思つて居る。私は實は京大旅行部で實際に經驗して、此の二つのものが根本的に一致して居るにも拘らず、實際的には終に分離せざるを得ぬ、さうするのが却つて本當に各々を生かす道だと云ふ結論に達した事が有つたが、だから吾々は今後とも恐らく探險の意義を感じ之に邁進せんとすればする程、又別な機關を建設してそれにこもらねばならないと豫想するのだが、それは前にも言つた様に時代の必然的な運命なのであり、矢張り根本的に於て共通點の有る登山家と探險家は互に仲良く助け合つて行くべきものだと思へる。(七四)

富士の雷

冠 松次郎

富士登山に怖ろしいものが三つある。その一つは冬期及び積雪期の登攀に際して、頂上を繞つて張りつめられた堅氷であつて、硝子板のうやな青氷、ピッケルの先をはね返すやうな強く緊つた凍雪の上で誤つて下らうものなら一大事で、若し顛落したならば生命の危険は必定である。

その次は富士の突風の怖ろしさである。それは想像以上であつて

富士特有の旋風が砂礫を捲いて頂から八九合目の急斜面を、非常な壓力をもつて吹き落ちてくる。かう云ふ時に登山してゐる者は相當の危険を感じる。始終烈風に抗して安全の歩調をとらなければならぬ。

風速三十米突の烈風を侵して上つてゐる時、頂上に當つて大音響を感じる。その方を見上げると富士の額の山の窪で旋風が起つてゐるのだ。砂、石、草鞋、辨當のカラ、硝子の破片、そんなものが煙のやうになつて渦を巻いてくる。ゴウゴウと唸りながら瞬間に私等の方へ押しつけてくる烈風の爲に身體が持ち上げられるやうだ。私等は路傍の岩影に踞むか、石室の影にかくれる。石室が揺ぐ、砂礫は瀧のやうに頭の上から遠慮なく降りそそぐ。息をすることも出来ない位だ。突風が更に四十米突を起すととも登高は覺束ない。さう云ふ時には避難小屋へ潜り込んで風の静まるのを待つより方法がない。冬期に於ける富士登山の危険は頂上附近の青氷とこの強烈な旋風との合作に遭遇した時である。

第三は登山期に於ける富士の雷である。高山の雷は平原のものやうに上からばかり落ちて来ない。直接雷雲の中に立つので、それが實に怖ろしい。ピッケルがブンブン唸る。毛髪が引張られる。手足が痺れる。かう云ふ場合には金屬を身につけてゐることは甚だ危険であつて、眼鏡、入歯、ピッケルなどは特に注意を要する。富士の雷はゴロゴロと上で轟くやうなものではなく、バリバリ、パンパンと爆發するやうな音響が紫電と同時にだしぬけにくる。それが身邊に轟き、山體にコダマする、壯麗を通り越して息づまるやうな怖ろしさだ。愈々強くなつてくると金氣と云ふ金氣は皆閃光を放つ。小屋の中にある電話器などから火を放つて近付くことが出来ない。自在の針金が火花を散らす、とても眼を開いてゐられない位だ。淺間神社の中で爐を圍んでゐた社の人達が、すぐ前にあつた鐵の五徳に感電した爲皆膝を打たれて暫くの同立つことが出来なかつたと云ふ。かういふ時には頭から蒲團を冠つて雷雲の通過を待つより仕方がない。

戰闘帽の庇の方を後ろにして御鉢巡りをしてゐた人が、久須志岳附近へくると、後頭の處で何か鳴くやうな音がするので、友達に向つて「僕の頭に蜂がゐるのではないかと」聞いたたら「君、何もあるやしないぜ」と友達に答へた。併し何だか頭の後ろの方でブンブンと蛇か蜂が唸るやうな音がする。變だと思つて考へて見ると、後向きに冠つた帽子の星章に電氣を感じてゐるらしいので、駭いて後ろを見ると山の中湖の上に黒い雲が集まてそれから放電してゐるらしい。あれだなと思ふと戰闘帽を懷に一

散に頂上の石室へ駆け込んで避難した。やがて強烈な雷雨は頂に殺到した云ふ話だ。相當遠い處に起つた雷でも、富士の頂の岩石に感じて、ジーンジーンと鳴ることがある。頂上の金明水の小屋ではよくさういふ響を聴くと云ふ。

富士の頂の岩石は相當鐵分を含んでゐる。それだから頂上で磁石を置いても本當の位置を示さない。鐵分を含んでゐるから電氣を鋭敏に感ずる。ひどい時には岩一つ一つが閃光を放ちくんと唸る。その氣味の悪い音響が雷鳴と合して約五百尺も深い御鉢の中へコダマするのだから、それは實に物凄いやうだと云ふが、これは實感だと思ふ。夏中金明水の石室に居る小屋の主人の渡邊君から聞いた話である。

併し雷雲が麓に延びて山上は晴明となり、夕陽が影富士を映すやうな夕、お山の氣分は實に快適である、今しがた山頂を荒れ廻つた雷雲は、今下界で盛んに夕立を降らしてゐる。その電光の餘波が雲を劈いて時々上つて来る。

山上は既に爽涼の氣に満ちてゐる。私等は最高峯剣ヶ峯の岩角に腰を下ろして、夕星の光る水のやうに清んだ高空を仰ぎ、雲上に牙えた南アルプス、八ヶ岳、奥秩父の連山を見て悦に入る。

雷は雲の下なり山鳴る。虹立つや富士の御鉢の霧晴れて



木曾御嶽の「種時き爺さん」

中村 清太郎

木曾の御嶽に「種時き爺さん」が出る、——之は私には聞くのも見るのも今度が初めてであつたが、歸來それがあながち私の寡聞のせむばかりでなく、山の識者の間にも案外知られてゐないと思はれる節もあるので、文獻など調べの違もないままに、取り敢へず見聞の次第を報告して大方の教へを乞ひ、併せて多少なりとも後來の觀察に資することとした。

先き頃、即ち今年五月下旬に、私は宿願の一つ御嶽山の春色を描かんとて木曾に入り、七八合以上残雪に輝く長城のやうな御山を仰ぎつゝ、しばらく黒澤口三合半日出瀧に籠つて畫作に従事してゐたところ、或る日雨の宿で人々といろいろ話してゐる時、下の山村の屋敷野から仕事に來てゐた中老の石工さん（之は例のこの山に多い靈神碑を刻むので）が私の繪を見て、「種時き爺さん」が出てゐる——と言ひ出した。

私は少しく意外な氣がしたが、後に晴れた御山を指して詳しく教へて呉れたので、始めて納得が出来たわけである。其れに依ると、頂上颯々峯の直下、白雪の間に暗

色を點する山嶺の、やゝ南寄りの一つがその形をなすものであつた（挿圖参照）。私はそれまで何も知らずに描いてゐたのだが、さう言はれて見るとなるほど、小笠を戴いた老翁が頂上の方に向つてやゝ前かがみに立ち、腰の邊に大きな袋を提げた姿、さう見れば見られるのは面白い。

この袋を提げてゐるといふ處にまさしく種時きの種時きたる所以が籠められてゐると察せられ、其の人の「袋」といふことに重點を置いてゐる話しぶりも私の耳に残つた。併し當時は既にその姿が大分融け崩れ、そこへ更に新雪を受けたりしてボヤけてゐる際であつて、毎年五月初旬その現はれる始めの頃は、いかにもハッキリと生き生きして見えるのだといふこと。

之がその年の種時きの時機の確かな日であつて、その頃即ち八十八夜の前後になると、麓のお百姓達は（恐らく御山を拜んだ手をそのまゝ額に髣して、——その様子が想ひやられる、「さあ爺さんの姿が見え出したで、そろそろ種を下ろしてもよからすい」などと

こゝにあの一所懸命な春の農耕の營みが饒み始められるのだ、さういふやうな話であつた。

私はその後、土地の若い人にも年寄りにも、男からも女からも、同じやうな話を幾度か聞いたが、その際皆言ひ合せてやうに、懐かし氣な眼を輝かせたのを忘れないう。それでこの話が一朝一夕のものでなく、口から口といふより血から血へ傳はつた根深いもので、而かも現在もその働きを止めてゐない、斯の郷土の活きた脈であり、それ以上山と人との絆の結び目ともいひ度い程のものであるのを感じた。私は思ひもかけず授かつた會心の山土産として、この話を抱き歸つたのである。

誠に、待ちわびた春を迎へて立ち上る山民達は、希望が胸に溢れる一方、厳しい風土に托する大切な作運の第一歩を思へば、そぞろ何かに祈り何かに頼らずには居られまい。つまり何か高い所からの啓示とか許容とか或は號令とかいふものを希ふ、いぢらしい心持ちがあるにちがひない。もとより作物の成就豊穰を神に祈願し、辛苦の收獲を先づ神に供へてその恩徳を謝するのは、敢てこゝの農民に限らない。併しかゝる荒い天然の懷ろで（一萬餘尺の大火山の直下、三千尺の高距に位する山村）、

況やそれが祖先草創の時代に於ては、その切なること、思ひ半ばに過ぎるものがあらう。彼等が山といふ神の宮居を仰いで、そこにあつたかな神慮の標しを占つたとて決して怪しむべきことではあるまい。斯くてわが「種蒔き爺さん」は、爾來靈驗の磁性を帯びて、天地の界に現はれなければならぬ宿命を擔つてゐるものではなからうか。

併し餘りに私は、身の程知らぬ空想に耽り過ぎたのを恐れる。さて、單に「種蒔き爺さん」といへば、山を知るほどの人は直ぐ、あの北安曇の野に立つ爺ヶ岳のそれを想ひ浮べるであらうが、この御岳のもやはそれと、由來なり現はれ方なり先づ軌を同じくするものと見て然るべく、形さへ同工異曲の趣があるやうだ。但し之が何故あの爺ヶ岳の場合のやうに、人口に上らなかつたのであらうか。

それには第一、御岳といふ山名に直接關はりがないので、穿鑿の對象にならなかつたといふ事情があり、まだ他に理由も考へられるにせよ、やはりもともと、之を望見する山麓土着の住民の數も少く範圍も狭く、そのうへ街道の耳目からは隔たつてゐたためにちがひない。(御山參拜は四季に亘るとはいへや、舊盆前後に集中す

るし、現代の登山は初期は殆ど夏季に限られ、其後に至つては幾らかこの山を閑却した傾がある)。

爺ヶ岳の比較的廣い人口も密な平野に臨んで、その觀望に任せてゐるのに比べて、此處では御岳東麓の村々それも三岳村の黒澤以上二三の小部落が主で、他は王瀧村の一部恐らくは崩越の奥あたり、それにせいぜい開田村の一隅ぐらゐに限られるであらうから。開田村は私はまだ歩いてゐないのだが、この方面に行かれる方は注意して頂き度いと思ふ。尙ほ木曾川の東岸となると、見える處はあつても距離が遠くなるし、力の點で果して如何であらうか。(陸測五萬御嶽山、加子母、木曾福島等參照)。

併し何れにしても、この口碑の中心が、黒澤口最奥の山村たる三岳村宇屋敷野であることは、その方角及び近さからいつても略間違ひなく、恐らくその發祥の地も、屋敷野から然らずんば一段下の羽入あたりではあるまいか。黒澤鎮座の御嶽神社里宮(祭神大己貴命)は延長元年(今を距ること一千十八年)の創建と聞かえてゐる。その頃わが山民は、果してどの邊まで入り込んでゐたであらうか。兎に角「爺さん」の誕生も、斯くて杳々たる時の霞の奥に在ることが

想像されるであらう。

その屋敷野(海拔一千餘米)からは、實に御岳東面(この山の表側と見做される)の殆ど全貌が仰がれ、南は三笠山から北は繼子岳に亘り、蜿蜒一鏈の山脈の勢ひを作してゐる。就中主峯の一廓の如き、「山」といふ象形文字は此處で發明されたのではないかと疑ふ許りの骨法を示す。而かも距離は近く、仰角は大に、それが白雪を鏝つて、村家の石屋根、新緑の端山裾谷を壓する景色は、誠に眼覺ましくも崇といふ感を感じる。

而して「種蒔き爺さん」は、その全幅の中央一際高揚した頂上劔ヶ峯の峯頭に現はれるのだ。之を顔面に譬へるなら、正に眉間ともいふべき位置だ。詳しくいふと、絶頂から稍南の方王瀧頂上に寄つた、カール狀の雪田と雪田との間を劃する小尾根、それが像の主體と思はれる。恐らく、比較的急傾斜の岩壁と偲松が、いち早く春の陽光に雪を拂つて、背を擡げるものであらうか。之とその周邊を圍む殘雪とで、この幻像は描き出される。固より之に睛を點じたのは麓に生を寄せる山民であつた。

像の脚下は、その南方から出る傍尾根と、北方八合目金剛童子の尾根との間に、三つ重ねの白銀の盃にも似た大カールを抱いて、積

雪最も豊かな黒澤谷となり、深林に百間瀑を懸けて、大のぞき谷を合せ、木の翠り水の碧りの大手をひろげて、この小高原の一端に巢喰ふ屋敷野の村里を抱きかゝへる態だ。人々は此處にさゝやかな水田を耕し、豆や稗、栗の山畑を拓き、桑を植えて蠶を養ひ、兼ねて御山登拜の白衣の旅人を送り迎へてゐるのである。

さて其のことあつて後、數日打ち續いた快晴と、半日一夜の凄まじい雷雨のあと、六月も初旬を過ぎる頃には、「爺さん」の姿は、どこかにその傍を忍ぶばかり、いつか行方もしら雪と、消え失せてしまつたのである。それも道理で、恵み深いお爺さんは、最早今年の務めを終つてゐたやうなものだ。麓の村々では、代掻きも大方済んで早くも植付けが始まり、か細い緑りの列が涼しげに戦々山田もあれば、傾斜の豆類は逞ましい莖の上に幾枚かのほん葉を、強い日光に擡げてゐるのだから。

恐らく不死の老翁は、半ば形を水に變じて、かの緑秧にそゞぎ、昇つては雲霧と化し、やがて名残りの山肌に霜とおさ雪と積み、かくしてめぐり来る年の春の陽に、又その芽出度い姿を顯はすのであらう。唯之を仰ぐ人は、果して舊年と同じであらうか、否か。あな賢。

總じて山の積雪に現はれる種々な形態と口碑は、山民の生活就中その重心たる農耕に關するものが多く、自然への人間の親和歸依の象徴として、吾が祖先の自然を見る眼の鋭どき、感ずる心の温かさを傳へる遺産として、誠に面白く、貴とく、又味ひ深いものである。即ち蓮華の代馬、爺ヶ岳の種蒔き爺さん、妙高の農牛、白峰の農鳥、富士の農男や豆蒔き小僧など、從來よく知られてゐるものが、之に更に御岳の種蒔き爺さんが加はつたのは嬉しい。そして御岳のやうな古來の名山にして猶然り、之からもまだまだこの種の例が現はれないとは限らないと思ふと、更に胸が躍るのである。

今「よく知られてゐる」と言つたが、それは古文獻は別として、「山岳」誌上や自著に示された、白峰富士その他に就ての小島鳥水氏、特に農鳥に關する野尻正英氏、爺ヶ岳に於ける故辻本滿九氏の如き先覺の勞作に依て教へられた所、最も多いのである。にも拘はらず尙ほ或ものは、名前が知られてゐる割合に本體に關して、つまり形狀、出現の時期、場所、由來、言ひ傳へる生きてゐる區域、望見出来る範圍などになると、思つた程然れず、中には又現地ですら諸説區々で、聊か取捨に迷ふ

ものすら無きに非ず、といふ實情にあるやうだ。

歸來これ等に想ひを回らせば、

いかに畫業に心と時を奪はれてゐるとはいへ、見残したもの、聞き

洩したこと、考へ及ばざりし節のみ多く、尙又それ等の誤りさへ保し難く、唯再遊を期するばかり。

殊にこの御岳の場合など、前述の通り、私が見たのは既に時期が遅れてゐるので、今後頭初出現の際に、それも農民の生活に交つて觀察すれば、もつと面白い事實もあるにちがひなく、又さうでないといふに機微な消息は掴めないであらう。尤もさうなると私の力では及びさうもないが。

その上、元來この種の口碑も世が移るにつれて影が淡くなり、且は純粹性を失ふ恐れがあるので、旁々氣は焦つても不敏獨力の到底よくする所でない。若し同好諸賢の協力で、博く資料や報告を集め、正確な記録が作られるならば、と希つてゐる次第である。

唯その際、熱意から里人に向つて誘導的な質問を浴せるのは禁物であり、又早合點や餘りに主觀的な説を、反つて鵜呑みにされる危険のあることを、自戒すべきだと思つてゐる。既にこの害毒を被つたかと憂へられる例も、無いわけではないのだから。(十六年六月)

滿洲國間島省主催

長白山踏查隊參加記

竹内 亮

昨年(康德七年)滿洲國通化省撫松縣主催の大調査登山團が長白山の西側の、かつて英國人のジェームズ、ヤングハズバンド、フルフォード三氏が登つたコースを往復した次第は、すでに會報第一〇四號で報告したが、今夏(康德八年)は通化省の東側の間島省主催の長白山踏查隊が、山の北側の安圖を基點に二道白河沿ひに登り、山頂天池の外輪北西部の一峯觀日峯を極め、二道白河上流の温泉の存在を確かめ、又天池の水が二道白河となつて流下する最初の大瀑布龍門瀑の高さを測定し、更に山の北東側を大迂迴して朝鮮の神武城に出づるコースを完成する等の、相當著しい收獲を得て居る。筆者は林野局から他に局員二名と共に参加を命ぜられ、無事その全行程を踏破することが出来たので、昨年の登山團の概況を報告した因縁によつて、又その概況報告を執筆記録して置くこととする。

此の登山の主旨は長白山が近年國立公園候補地として、しきりに問題になつて居るので、その山城

の西半を擁する間島省としても、それに對して特別の注意を拂ひ、省參事官淺子英氏の提議によつて、國立公園としての參考資料を蒐集することを主目的とし、併せて諸資源の調査をも行ふにあつた。

國務院企畫處に於てもこの計畫に賛意を表し、淺子參事官も列席して出發前に、國務院内に於て二回の打合せ會を行ひ、計畫の萬全を期し、參加機關並びに相當人員もあらかじめ指定することとなつた。そこで參加指定諸機關としては地元では省公署、龍井營林署、協和會、新聞社等があり、中央側(新京)では國務院弘報處、同地方處、同統計處、同企畫處、開拓總局、林野局、交通部、興農部、民政部、大陸科學院等で、他に南滿洲鐵道株式會社の吉林鐵道局等があつた。それ等諸機關より參加する人員は約八〇人に達したが、各自は七月廿五日一齊に京圖線明月溝驛の明月溝街に參集し、それぞれ班別に配屬せられ、隊長には淺子參事官が就任した。

六月廿六日にはトラツク五臺に分乗して早朝明月溝を出發し、今回登山の基地である長白山北麓の安圖縣城に向つた。行程一六六軒途中約四〇軒位毎に小邑があるが、他は殆んど無人の境で、大きな峠を二回越える。沿道は匪賊の出沒最も甚しかりし地區で、至る處に討伐隊苦戰の跡があり、戰死者の墓標には自から頭の下るのを覺えた。安圖に近い約十キロの峠にて初めて長白山の全容を望み、安圖に近づくに従ひ山容次第に明らかとなつて、頗る愉快な思ひをしした。午後四時五十分安圖に到着、旅館に分宿した。

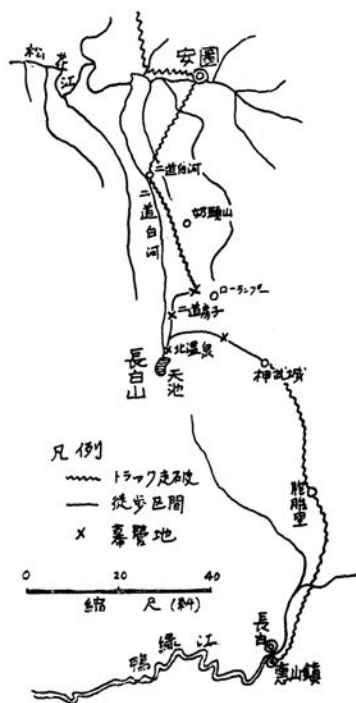
六月廿七日は早朝安圖縣公署に參集したが、全員は警備の警官約四〇名、苦力約六〇名を加えて約一八〇名となり、それを總務班(第一班)開拓殖産建設班(第二班)保健班(第三班)警備班(第四班)強力班(第五班)及び隊長の副官部の六班に配し、九臺のトラツクに分乗して午前八時安圖縣城を後に出發した。その日の行程は昨秋完成した朝鮮(通ずる警備道路を五八・六軒走破、ローランブーの手前約二軒の海拔約千キロの高原に幕營した。

途中は原始の大樹海で、マンシウカラマツを主とし、テウセンマツ、エゾマツ、タウシラベ、テウ

センシネバリ、ドロ、モウコナラ等が繁茂して居る。安圖から約一時間の處に觀白頂子と云ふ高地があり、長白山の全容が奶頭山の双頂峯を前にして壯麗そのものの姿が望まれた。又安圖から約三〇軒に二道白河といふ武裝移民の部落があり、一帯には滿洲にも珍らしい赤松の純林があるのも、興味をひいた。二道白河から十數軒で奶頭山に達する。奶頭山は乳頭山の意で、双峯乳頭狀をなすによつて命名された死火山である。その一峯の中腹の高地から望める長白山の殘雪斑々たる麗はしの山容に全行程中第一の眺めであつた。

六月廿八日 愈々徒歩行程に入り、原始の樹海を分けて細々と踏まれた機區を八軒、二道房子の水場上の密林の高臺上に匪賊を警戒しながら幕營した。

六月廿九日は二道房子を出發、右下に二道白河の深い溪谷を見下ろしなから、階段狀になつて居る大地形をグングン登つて、約十五軒で針葉樹林を終り、エゾダケカンバの落葉樹林に移つたが、二道白河の源流部の峽谷の兩岸が數百メートルの高崖をなして迫り、天池より落る龍門瀑を正面にした、壯大な景觀が展開、深い靈感に打たれた。午後四時頃二二軒の山路を踏破して、殆んど森林限界に近い



二道白河源流の幕営地に到着して、テントを張った。龍門瀑へは約二軒、途中河岸に温泉を湧出し、假に北温泉と稱したが、龍門温泉と稱するのが妥當かも知れぬ。湧出口は川岸約一軒に亘り多数あり、泉温攝氏四八—七八度であつた。僅かに硫黄臭があり、味は殆んどないが、かすかに褐色を帯び、傷には特によくきく、適宜流れをせきとめ川水を加えて浴するのである。

六月廿日快晴にめぐまれて左岸正面の岩壁の間に僅かにエゾノダケカンバ樹林が茂るところの細徑を登り、上部の山稜に出で、チョウノスケサウ、ミヤマゲンゲ、キバナシヤクナゲ、モウセンツツジ、チシアマナ、クモマリンドウ等の高山植物が美しく咲く残雪の急斜面を登り、約三時間で天池外輪の北西部の一峯觀日峯に達した。

紺碧の天池は岸邊に猶浮氷を残し、外輪の内側にも残雪斑々として、景觀まことに壯麗雄大であつた。一部の人々は外輪の内側の急斜面を下つて、天池畔で天池の流出口の東側の臺地にある白頭山宋徳寺に至つたが、大部分は登路を下つて、幕営地に引返した。筆者も高地からの地形偵察に留め天池下降をやめて登路を下つた。

七月一日は朝來天候不良、山上は雨雲に閉ざされたが、筆者は豫定通り二道白河沿ひに直下七〇米の龍門瀑を近くから觀察し、左岸の崖の危道を横斷して、瀑の上に出で、緩流部を傳つて天池畔に至り、更に熔岩臺地上的宋徳寺に至つた。寺は初め日韓併合當時奶頭山に移住せる半島人の寄進にあり、昭和三年改築されたものであるが、現在無住で荒廢に委してある。八角の堂内中央に「上帝天佛之位」なる位碑が置かれてあつた。この木材を險絶な途中の地形から考へていかにして運んだかを思ひ、信仰の力の偉大さを痛感した。歸路瀑布下の岩礫斜面で大岩崩れに遭ひ、危いところで命拾ひをした。夜は豪雨となり、翌日の行程を氣にしながら寝についた。

七月二日夜來の豪雨が午前九時頃迄つづき十時すぎ漸く出發出来た。雨を吸つた重いテントを負ひ二道白河右岸の急斜面を登る苦力の勞苦は甚しかつた。登ると高山植物帶の緩斜面で、それを北東方向に横斷しつつ約一五軒で夜の雨中に漸くテントを張つて、炊事もそこへ横になつた。

七月三日幕営地を出發高原を南西方向へ向ひ、約二〇軒で朝鮮の神武城へ午後五時頃到達、ここで警備員及苦力の安園へトラツクで歸るのを萬歳で送り、劇的な別離をなして、本隊は約七〇軒をトラツク五臺にて走破し、四日の午前零時半頃裏山鎮に到着、宿舎に入つた。短かい睡眠をとつて、その日十時から山行の座談會を行ひ終つて解散式と忙しいプログラムを終つて、この行を閉ぢ大部分の人々はその日の午後の汽車で吉州へ出發したが、筆者等は裏山鎮に更に二泊して、朱乙を経て、龍井に至り、七月十日新京に歸來した。

今回の山行は概して天候にめぐまれ、二道白河源流より天池外輪山及天池へのコースを開拓し、更に北東斜面を大迂迴して神武城に出たことは登山史上に、一時期を劃する成功を収めたのであるが、計畫、給養、統制等素人の無謀から來た幾多の缺陷があつたにもかかはらず、この大成功を勝ち得たのは一に隊員各自の紳士的自制と、朝鮮側官憲の絶大なる協力に負ふところが多かつたと思ふ。

猶この山行は新京の加納惠一郎氏(間島省囑託)により十六ミリに收められ、二巻にまとめられて居る。又間島省公署では國務院企畫處の協力を得て綜合報告を編輯する意向があるといふことでありそれが完成すれば、間島省公署での所期の目的は結果に於て十分達せられることとなり、一大貢獻たるを失はぬ。

指導標

橋本三八



頂上の右側を捲いて下山に向ふ途すがら、自分は今建てゝきた鞍部の白木の指導標を幾度か振返つて見ては、何かそれに安心しきるものを求めてゐた。

いつの間折つて來たのか眞赤な蓮花つゝの一枝と、一握の山葛の花が指導標の根元に置いてある。預つて來た線香も焚かれた。

最後の十本目の指導標が奇しくも遺難現場の近くとなつたので、せめてこの指導標を供養塔としようと、建設を終ると香華を手向け、一同その周圍に列んで靜かに黙禱を捧げるのであつた。

「一本の指導標があつたなら」助

かつてゐたのかも知れない、と謂はるゝほど、今回（五月十六日）の遭難がコース不明に起因してゐるだけ、最初の遭難事件（昨年二月十一日）直後、その建設を計畫しながら、次々と延期してゐるうち、一週忌が来て、今年こそは登山シーズン前にぜひ實現せねばと、考へてゐた矢先の今度の遭難で、自分は胸に釘を打たれたような思ひに慄然とした。

それに最初の遭難事件にしても、その時の悔はまだ清算されず残つてゐるものがあつたのに。その日同じコースを吾々一行もスキーで縦走中、彼の遭難者も徒歩で縦走途中、暴風雨と濃霧の尾根で顔を合せてゐるのであつて、若しその時吾々に今一步の餘裕があつて彼の身の危険を考へてゐたならば（たとへ難行で有つたとはいへ、誰もこのコースで遭難といふことまで深く考へてはゐなかつた——然し結果はそこが死線となつてゐるではないか）或は死の一步手前でも、救ふ方法があつたのではあるまいか。みすみす彼のみを悪魔の手に渡したような、悔がすつと自分の心には殘滓のように、解決し切れないで残つてゐた。

それにまた今回の「若し一本の指導標があつたなら」と考へらる遭難事件に至つて、二重に叱咤さ

れるような苦痛に責められねばならなかつた。

そうした複雑な心境のうちに、福岡縣山岳聯合會北九州支部で愈々指導標の建設が決定した時は、自分は人一倍の感謝と、今迄の責任の幾分でも果さして貰へる時が来たような安心で、その建設の日を指折り數へるようになって待つた。

その日、六月八日指導標建設の朝である、誰よりも早く集合場所に来て待つた、そして今日何事もなく参加の出来たのを先づ欣んだ。

T君と二人で設置場所現視班となつて、薄霧山から福智山に向つて、設置場所を決めながら尾根を、去る冬の第一回の遭難者に追つた頂に立つと、足許から流るゝように續く緑の尾根は一望のうちに收つて、そこに建設班の人々の白い姿と、指導標が建てられてゐるのが見えた。

その人々の活動してゐるのを見てゐるとき、自分の心は何か青空のように爽やかになつてゆくものがあつた。

一人の職人も人夫も加らない、北九州十餘の會から六十餘名の山岳人に依つて建てられてゐる指導標——振上げる鉄、堀上げるゝ

鉄、運ぶゝ石塊——その勞働はいとも晴々と行はれてゐる、邪心などみぢんもない、淨らかなる奉仕の精神、これこそ聖なる労働でなくてはならないであらう、然もそれが綠濃く空晴れた六月の山上で行はれてゐるとは。

第八號標の頂に全員集合を待つて儀禮を行ひ、君が代を齊唱する時、自分は涙ぐましい感情のこみ上げてくるものさへあつた。

ま一度鞍部の白木の指導標を振返つて見ると、自分は安心して山陰の急坂を馳けるように降りて行つた。

（この日第一班は八號標より分れると再び薄霧山に引返し點検と補助標を建設して日立小屋に集結。第二班は第九號標、十號標を建て、福智山、尺岳を経由、約三十軒を強行して午後八時半八幡市内に到着してゐる）

福山縣山岳北九州支部指導標建設の日に

圖書室事務所開室時間

毎日正午開室

月 水 金 午後八時迄

火 木 土 午後五時迄

新刊御通知

當書肆は見本配給致しまして、
んから速刻御申込願ひます

高村光太郎著

初版は泰書生紙刷特製本
定價二・五〇 送料一・四

詩集 智恵子抄

本書は、二十九歳の青年光太郎の詩「人」から始まり、年代順に、五十九歳の「荒涼たる歸宅」まで、三十年間に書かれた詩集である。その悉くは在りし日の夫人に、狂へる夫人に、今は亡き夫人に對する人間光太郎、藝術家光太郎の極點を剔抉してみせたものである。

富安風生

草の花

〔新版〕 送料一・四
定價二・五〇

富安風生

淡水魚

〔再版〕 送料一・四
定價二・五〇

木暮理太郎著「上巻・下巻、再刷出來！」

山の憶ひ出

上・下、合せて
定價七・三〇
送料三・〇〇

高村光太郎氏「山の憶ひ出」を読んでひどく感動した。

石黒忠篤氏——私は心から本書の出版を待つてゐた。

小島島水氏——世界的にも最高の山岳書です。

徳富蘇峯氏——登山の愉快さは此書によりて遺憾なく享受せらるる。

東京市芝區新橋際・復興ビル 龍星閣

右いづれも八月二十日發賣

振替東京五〇六五
電話銀座一六〇二

關西支部の頁

今度關西支部委員會の要望が本部役員會に納れられ、關西支部の頁が設置された。

關西支部の頁と云ふと何か奇異な感を持たれる方も有るかも知れないが、會報に潤ひを持たせ、總ての會員の方から、ほんの小さなものでも折に觸れて書いて戴ける様に其一つの試みとして關西支部で其を取纏めて發表したい、云はゞ其の先鞭をつけやうとしたに過ぎない。今度の分は未だ全部の會員の方に徹底して居ない爲に、殆ど集まらなかつたので、取敢へず小生の手許に戴いた一文を掲げるが、今後何によらず關西支部宛原稿お送り願つて、各位の利用法に従つて此の欄を活用して行かうと云ふのが今の所の考なので、各位が自分の頁として御利用あらん事をお願ひします。(前田生)

僕と歩行術

懶 愚 平

歩術といふことは、現在では辭典から抹殺されたであらうが、昔に於ては水練と同じく武道の一つであり、一般人にあつては常識でもあり、ある者にとつては必要な職業でもあつた。殊に飛脚と隠

密にとつては性根限りの研究があつたので、その優れたる者は自得の工夫をさへ持つてゐた。

岡伯敬の「千里善走法」には一歩の歩み一坂の上下にも心の配り方が書いてあり、「正忍記」は忍術の俚典ときくが修練によつては一四四十里は樂々とあるけるといふ風なことが書いてあるといふ。

僕の速歩法は書物から這入つたのではなく自得の工夫から生れたのではなく自得の工夫から生れた我流であるから一々根幹の理論を詳述し難く他人が僕の歩術を觀て説明を加へてくれるの外はなく、僕は單に實地の行者であつて理くつはその道の人に任せてよい。且つ醫師からは或はそのフォームにつき或はその鍛練につき批難を免れぬかも知れぬと思ふ。

さて、速歩の記録は、昔から稀世な健脚家が随分多く輩出したであらうが惜むらくは正確なものは残つてをらぬ。それでも飛脚の健脚なものにあつては京都から伊勢

迄驛路三十六里の道程を一日にかけたたり、輕井澤から草津迄十四里の山路を荷物運びつゝ一日に往復したものは近年まで残つて居つた。不及流の歩術家某と岡伯敬とが明和何年かに試みた歩術試合に

於て、江戸から宇都宮四十一里を朝立つて翌日の夕刻にはもう江戸の立止點に立歸つてゐたといふ。

並飛脚でも月三度、東海道を八日で歩く脚の男も可成り多く居たとか。田部重治氏によると一日に六十幾里歩いた男がゐたとか、實際に於て一日三四十里は上位の健脚家であるには相違ないが尙最上位ではなかつたといふのが正しいらしい。

僕の長距離記録は十九歳の夏、大阪中ノ島公園から京都圓山公園迄約十三里の道程を九時間少しであるといふ。それはその日だけではなくその翌る日は草津をへて鈴鹿の麓に宿り、かくて龜山、四日市を越して四日目に名古屋へつてゐる。その後廿二歳の時、荷車に一切の天幕、食糧を積み込み岡山迄六日間の旅行をしてゐる。

こんなことは昔の高名な旅行家や軍學者といはれる人々にあつては尋常茶飯事であつて敢へて特筆に値せぬが、既に脚を失つて終つてゐる現代人にとつては、これでも尙誇りうる記録だといふことは、むしろ悲しむべき事である。

古人の旅は専ら脚力にのみ依存し千里の道を往來する上に、籠の不便、往還の難儀、道路の粗悪、食物の不自由は言語に絶してゐたが爲めに、その人々の旅を思へば

今日の旅は實に容易であつて、よしんば日本國中を徒歩で歩んだといつても尙古人に對しては頭を下げて尊敬すべき筋道である、とてもその速と旅への心構へが比較にならぬからである。そういう現代に於ては、余の如き脚を主として不斷に山を駆け野を横ぎり民屋に一宿一飯を乞ふ苦勞人は先は少なく、自分は既に頽齡に近いが專念吾が歩術に精進するが故に、今日十里のコースを八時間に突破するだけの自信と用意とは常に備へてゐるつもりである。

速歩法とはいへ、その要領は唯無暗に脚のビッチを上げる計りでは體をなさない。急速度で歩幅をひろげる方法は第一に考へつく話であるが、それはむしろ素人考へであつて、成程速いにはちがいないが、短距離の場合や、或は見へすいた道程を競争するならばそれでもよからうが既に數里を越へる遠さでは、殊に山河の前途に横はる路では、そういう風な歩行法は決して永續する筈なく、況んや峠等をふくむ二三日の遠征が續く場合、疲勞の結果歩調が亂れて中途でのびてしまふか反つて非常に遅れるのが落ちである。

速歩とはいへ、所詮は疲勞の問題である。別言すれば迅速に歩くといふよりは疲れない工夫を極意

とする。十里廿里平調にして無理なくグン／＼と足をのしてゆく心得が第一である。十丁の道なら駈走で續いて早い。五里の道程なら、多少の無理も亦妨げない、しかし一日八九里を四五日も打續けてあるとなるとそれは參らぬ。あせると息が亂れ足許が覺えない。確實な歩調で息と脚との調節に工夫を用ひ、最も自分にとつて素直な自然な姿勢に於て、さて自得せる歩術を應用していそぐのである。

あるくのは足であるが、腰のすはり第一にする、腹がその上にはり、上體は正しく頭がその上にのり、足が歩く、以上を約言すると、腰と腹とが中心になつて、左右前後に上體が屈することなく眼は正視して左右前後を見ない。手の振り方、腰の動作、脚のすべりが滑かなリズムをつくり、これに息が無理なくして調和を保つたらば疲れることなく結果は極めて速い。坂の登りにかゝると自然に遅くなるが反つてあせつてはならない、足の裏全體をビッチリと土につけて確實に踏む、下りも急ぐことをやめて足歩幅を多少ひろめてひたむきに歩を進ぶ。平調の呼吸に十二歩乃至十四歩、稍早くして八歩、坂の登りは普通六乃至四、峻険にして一呼吸二足、これ

が僕のとつてある歩行法である。かうなると既に達人の域に至つたのであつて疲勞を覺ゆることなく従つて脚力も確かで又従つて速いことにもなる。息と脚とがチグハグであつたり、腰の振りやうと足の運とが不統一であつたり、腕の振りやうと前傾の具合に圓滑を缺くと運歩にも不自然を生じ歩行に狂ひがくる、呼吸がよく律呂に叶ひ、歩数と呼吸とがよく自然調和を保つならば、息は常に平靜で疲れないから千里も善走することが出来る。これを端的に申上ると、形よき姿勢と息との調節さへ旨くゆくならば脚は安らかに且速いといふことになる。跛はイビツの姿勢だから歩きにくい、そり過ぎては心棒の如く硬直し、前傾過ぎては胸を壓していけない。何れも歩行上美しき姿勢とはいひ難い。姿勢の美しさを保つ原動力は腰力である。腰が碎けてゐては速歩は愚か直ぐ疲れて終ふ。走る飛ぶ滑ぐ皆總て腰の強さにある。實は腰があるといつてよい。足のみに力をとられるとその足はフラフラになる計り、腰に氣合をかけてその上下の運動を滑かに運ぶと見るのが正しい「健り者」を腰の据つた男といふのはこの事である。元氣な強い人は必ず腰の強靱な人で顔色もよく動作も活潑で停滯しない。

い。歩術を學ぶ人は常にこの腰力を養ふ心掛が肝要である。そして腰を弱くする一番の原因は多淫である。故に多淫は最も慎しまねばならぬ。醫師にいはすればいろいろな説明があらうが以上の序述に間違がないと信する。かくてこの元氣な人にあつては十三四歳で五六里は無理ではない筈だ。それを醫師は二〇キロで澤山だといひ、五六歳で二キロとあるがこれも四キロはあるかせてよいと信する。多くの醫師は學問の請賣りであつて自らの經驗の歸納論はすくない。だから昔では養生訓に牛肉、ミルク玉子それがカルシウムからビタミン菜食に迄變つてきた。體驗でないから常に變説する。

管であり又年齢により體質により自ら異なるものがそこに存するが、僕の奉仕する健康法を卒直にあけて見る。誇らんがためではなく参考になりうることを信するが爲なり。

一、熟眠 二、寡食 三、朝夕一回十分間體操 四、靜座隨時隨所約十分間、以上を日課として必ず行ひ済ます。僅かこれだけの日々の行事がどれだけ僕の健康を増進保持してくれてゐるか。僕は唯々宗教的信念を以て固く奉信してゐるのである。その他、僕は常にあらゆる機會に徒歩を實行してゐる。どんな場合でも電車なら五停留所以内の距離では乗らぬことにしてゐる。此頃の都會人の不幸はバスに足をとられたことである。「歩け唯歩け」これは僕の心に銘記せる標語である。又それから常にあたふ限り家の勞働を買つて出ることにある。即ち部屋の掃除、水汲み、打水、雜草たき等々常に身體を動かすことである。つまらぬことであるが、これを爲すことは如何よき結果を人體に及ぼしてゐるかを自覺して自ら勵むところに自らの鍛練が成立しよることがあるのである。

ふときくが、一里を四十分であるくのは速い方で若し三十分でゆくとすれば側から見るとと恰も飛ぶが如く見えぬでもない。僕は四貫目の荷を擔いで平道ならば一時間間に五キロ強をあるき、山坂道を加へて五キロ弱、それを五時間つゞけてこの五月にはあるいてゐる。中山性の山なら一里一時間の割りで終日あるく自信はついてゐる。唯此際心得べきことは漸く疲勞を覺えたときとか、又可成り強行するときは、氣分の轉換を策すべきである。一本調子には飽きることもある。轉換法は脚速に變化を與へたり、一キロ平足、一キロの間は左足急調、右足これにそふ等いろ／＼と工夫を加へて楽しむことである。小唄をうたひ、足の運数を算へて見たり時には空想に耽つたりする。休みの時間と數とを切りつめて少くすれば足はドン／＼すむ。

速歩術につき書きすぎたが、要するに、平素よくあるいて凡そ自分の脚力に先づ自信を持つことが必要である。地圖をとつて今日の行程は先づ幾里、地形はかく／＼、天候と身體の調子は上々吉、然らばこの位のせるといふ凡その見當と自信とを植へつけてグ／＼足を運ぶ。物の本には最初は度々休息せよとあるが、單獨の場合は休みを少くし休息時間をつめてさへをればそれだけでも相當に速いものである。あせることと先きの不明な近道をとることは失敗の基である。下山を急ぐ事も足の關節を傷め易いから、下りは心を亂さない範圍でむしろより確實に大地を踏張つて稍歩幅をひろげてひたむきにでるのである。つま先きで蹴るやうな下り方は拙策で、常に上下共足はキビスより先づ地につくやうな歩き法が正しいのである。以上の歩術は唯に僕の體驗であつてこれを人にすゝめんが爲めではない。自らを披瀝して他の忠言を訊かんが爲めである。

關西に於ける

本會社團法人改組記念

會員大會

右準備中でありまして十月開催の豫定であります。

高山深谷刊行記念

展覽會大阪展

右も出版とにらみ合せ準備致します。御期待下さい



山の名、山の地名(七)

白馬 耕

* 間ノ岳 甲信駿國界 三一八
八・三米(白峰の一峯)

大體、前項で盡されてゐるとは思ふが、別名中ノ岳は北岳と農鳥岳との中間の峰なる意味からの命名である。しかし、之に荒川岳といふ別稱が土地の一部の人々には全く無かつたといふ事は斷定できないらしい。といふのは、この連嶺附近に河内をつく名前が極めて多いやうに、荒川と呼ばれる岳なり、澤なりが同様に多いこと、然も野呂川に合流する荒川といふ澤が現在の間ノ岳の東側にその水源の一部をもつからである。

しかし上述、野尻正英氏の記文によると、土地の人からの報告に「荒川岳と間ノ岳とは全く別山なり、而して同名の山二つあり、一

は農鳥の支峰にして、其の東南に立てり、西山村奈良田の地内に屬す」とあり、他の一つは今の鹽見岳にあたるものをやはり荒川岳と呼んだとある。茲にいふ農鳥の支峰といふのは、五萬分一地形圖による大唐松山(二五五四・八米)に當るであらう。この大唐松山も野呂川の一支流荒川の源に臨んでゐる峯であるから、荒川岳と呼ばれたことも無理からぬと思はれる。

荒川岳は「早川の西に在つて白峰の枝山なり云々」といふ記述が「甲斐國志」にあるのを見て、大唐松山の舊名がむしろ荒川岳であつたとする方が穩當のやうである。又別に、この間ノ岳に、東俣山といふ名前があつたこと、然も「甲斐國志」の當時において白峰と專稱したものは東俣山であり、別當代は白河内岳に當り、間ノ岳、中ノ岳の名は農鳥山の別名であつて、東俣山にこれを附することは不當であると云ふこと、然も、甲斐ヶ根、東俣山、農鳥山、白河内ノ岳、大籠、廣河内ノ岳を引くる

めて單に白峰と呼ぶ事にしたいといふ意見が記述されたことがある(七ノ二、梅澤、山川兩氏)。山岳七ノ三「白峰山脈臆測圖」参照。茲にいふ白河内岳は五萬分一地形圖「大河原」によると今の廣河内岳(二八九一米)、廣河内岳は今

の笹山(二七一・六米)に當つてゐる。しかも別當代といふ呼名は現在の圖幅「鰐澤」に見られ、西山村湯島に近い一峯(二二五米)に附けられてゐる。

そこで東俣山の呼稱であるが、之について「間ノ岳は井川の東俣の上にあるの故、田代の方などでは此山を東俣山と呼んで居るのであらうと思ふ」と記されてゐる(七ノ一)。事實、大井川の上流をなす東俣澤の水源は間ノ岳の西南側に發してゐるから、土地の人々の呼名として當時この異稱があつたのは推察することが出来る。

* 農鳥岳 甲斐駿河界 三〇二
五・九米(白峰の一峯)

當山が所謂「白峰」のうちに含まれる経緯については上述したから、茲では山名の發生について記したい。名取氏の報告では、これが三山のうちの南岳に相當するところが云はれた(「北岳」項参照)。

この岳の頂の直下、胸壁の上に印せられる殘雪の鳥形による命名である。この鳥が見え始めると農にかゝる。甲府邊からは晩春より初夏にかけての鳥形が最もはつきりする。農鳥は鶏のこと(三ノ三、小島氏白峰山脈の記参照)。

或はこの殘雪形に關し他の一説がある。鳳凰山から見ると農鳥が現はれる。晩春、雪消えの後に黒

く白鞍をおきシンドリ、ハンドリ(馬具)を備へてゐる。秋になると黒馬は赤馬に變る(四ノ三、野尻氏)。

* 大カンパ池(白峰北岳) 甲斐

北岳東側に水源をもち野呂川に入る澤、大カンパと呼ばれ、之と相並んでその東南側に小カンパ澤がおちてゐる。この水源の傍に白根御池(大カンパの池)がある。

北岳への登山道開拓者は芦安村の舊家の先代名取直江氏で明治四年に官許を得て獨力で拓いた。又甲斐ヶ根神社の本宮、中宮、前宮を建てたのもこの人であつた。前宮は杖立峠附近、ヤセオネの東側山腹に、中宮は大カンパ澤、本宮は北岳の絶頂にそれぞれ祀つた。

この大カンパ澤を御池に向つて登つていく途中に中宮がある。小さな荒れた御堂であつた。頂上石祠の祭神については私らその當時の登山の際には全く無頓着であつて今顧みると洵に申譯ない氣持がするが、明治四十二年八月登山した野尻氏の記文によると、この石祠には大日如來を祀り、元は六、七寸の黄金像が安置してあつたが當時はすでにこの像は鳳凰の屏風岩に移してあつた相だと云ふことが書いてある。大カンパ池畔の石碑には金福天女と刻んであつた。しかも此の池に直面しての野尻氏の

感想は「想像は薄暗い、物凄しい白樺の林の中にでも光つて居さうだが事實は左様でもない……水の色は如何様だが、左程深相にも見えない、周囲は開闊である云々」と記してある。(山岳四ノ三)。

そこで、オーカンパの語義であるが、カンパに拘泥して考へれば、白樺や岳樺がこの池をめぐる地邊或は附近の澤に多かつたからの名と請取れる。事實、白樺があつてその土地の俗名が生れた例があり、日光男體山附近にて、白樺金剛童子なる小祠の傍に數株のシラカンパありて枝を交し、土人此地を指してシラカバといふとある(山岳一ノ一、頁三五)。

しかし、このオーカンパの呼稱發生については、もう一つの解釋がもてると思ふ。それは此の地方の山間に聞かれるコンバといふ方言からの轉化ではないかと云ふ點である。杖立峠附近の鳳凰山道に沿ふてオーコンバと呼ばれる所がある。鶴殿氏は「大木場」と宛字しており、通過の時は木挽が居つて白樺の材を板に挽いておつたと記してゐる(山岳七ノ一)。尚、この近くの例をもう一つ挙げると、甲斐駒岳の尾白川右側稜、日向山三角點の附近の板コンバと呼ぶ平地がある(六ノ三)。こゝには炭焼の茅屋があつた。

之らの例は何れも山間といつても、可なり高所の尾根の部分にある小平地で、前者にも小屋があり木挽の仕事場であるが、後者もその際は炭焼の家族がおつたと云ふが、板材など時に挽いた場所とも推察することが出来る。

北岳の白根御池をめぐる平地は確かに此の種の地形の場所であり、それが比較的大きい空地だから、大コンバ又は大コバと呼ばれたのが、他のコンバと紛れ易いためか、或は自然に音韻變化によつて此處だけがオホカンバとなつたのではないかと思はれる。或はこの澤自體にも土地の人々がコンバと呼ぶに適した場處があり、大きいコンバのある澤を大コンバ、小さい其の方を小コンバと呼んだのであらうか。中社祠のある邊は一つのコンバと地形から云へる。又事實、御池やこの澤沿ひの小平地が、以前において、材木や木挽作業などの足溜りとならなかつたとしても、この種の似通つて形式をもつ空地が、他の例から當然さう呼ばれることはあり得るのである。恐らく、この場合は白樺の類が多いからの呼稱發生ではないやうに推察してゐる。今となつては大樺、小樺と宛字しても差支へないと思ふが、出来得れば、この種の場合は假名文字で書いておくの

が良いと思ふ。そこで問題となるのはコバの元の意味であり、單に山中の小平地、空地を意味する「小場」か、木材作業關係の「木場」

であるか、或は焼畑のコバかといふことなどであるが、多くの實例を検討した上でないと確かな事は云へない。



北 山 渡 佐 北 縦 走 報 告

章 隆 崎 川

本年八月十七、十八日の兩日に涉り佐渡金山頂に一泊北佐渡山脈を縦走したが、その折同行の佐渡山岳會幹事小菅任助氏と、縦走山地に無名の所が尠くない爲、共に相談り合議の上新地名を附し、今後新しい地名に依つて縦走路を呼ぶことにしたので新地名命名報告の爲本文を起草した。

金北山はどの登山口から登つても三里で、單に金北山に登る丈なら兩津發バスで金澤村尾花に下車、これより山頂まで往復九時間であるが、コースを加茂村梅津口にとり、タダラ峯、岨嶮堂山、金

北山、妙見山、青野峠經由相川に下る縦走は相當健脚家でも困難とされてゐる。

今回私の探つたコースはバスで中興まで来て佐渡汽船の佐々木勇氏と植田旅館に一泊、翌朝千種の明治記念堂に佐渡山岳會小菅任助氏と落合ひ、途中から同會の山城九平氏が合流して大和田徑を登つた。金北山丈ならその日の中にかへれるが、翌日はタダラ峯へ縦走するので何うしても金北山頂へ来て一泊して置かなければならないのだが、今日は登り半日コースを一日で行けばよいのだから實にの

んびりと道草を食ひ乍ら登つて行つた。三本槍の水場を過ぎると薬師岳のキャンプ場で國中平野の田地が美しく展開、ツツジが原は臺地狀の草原で佐渡山岳會の命名である。これから妙見へ直登せずブドウコソ（富士山大澤側には三平横道「現御料局道」がある。こゝでは道を瀬と呼ばれてゐた）の緑蔭や小田代をからんで妙見と二之岳の鞍部のシラバに出た。（佐渡では青草をシラグサと云ひ、草地をシラバと云ふので以下草原をシラバと呼ぶ）このシラバには松蟲草が夥しく咲いていつまでのびてゐたい樂園であるが名がない。妙見二之岳を結ぶ重要地點に無名なのは遺憾なので松蟲平とした。ここに荷を置いて妙見へ往復後佐々木氏は歸り、我々は二之岳（この山頂も美しいシラバ）より二之岳越場を下りシラバ刀根に出た。尾瀬の燦田代の上田代を佛彷彿させる縦走路隨一の美しいシラバで刀根は俚言の峠（古語）で放牛がシラグサを喰んでゐる。金北山に着後、山城氏は下山、その夜は日本海に沈む眞紅の落陽、いつまでも血のやうに赤い水平線、兩津沖や海府沖に大展開した鳥賊釣舟の千に近い漁火に佐渡の偉大さを認識し、又「荒海や佐渡に横たふ天の河」の芭蕉の句に隠れない銀河の壯觀に驚

嘆した。

翌朝は内地の飯豊山が黒く盛り上るあたり、鮮麗な旭日に合掌、その旭光が海面に火の柱の如く佐渡へ眞直ぐ燃えうつる壯觀に恍惚すること暫しであつた。今日は大平、青粘の二つの刀根を越してドンデン山へ縦走する日であるが、縦走路は金北山頂から指呼出来るが、大平越までにはザレバが多く特に赤肌のザレバ、白肌のザレバの二峰が手にとる如く見えるが、小菅氏は今迄人に度々きかれがあの赤や白の色彩のザレバの名が分らず返事に窮してゐたと云つた。又このザレバ以外も尾根通りは近來登山者の交通が稀のため灌木が密生して通過に多大のアルバイトを強要されてゐるので役ノ行者に下りついてから、海鷲の勇士の如く鉢巻をし、大鋸と大鉋を出して、前と後からとで、バツサ／＼と薙ぎ、或はひき倒しつつ前進した。遠い祖國の山を清掃しつつ進む氣持は實に朗かで云ひ知れぬ嬉しさがゾク／＼身に浸み渡つた。

最初の一山を乗越すと又美しい丸々としたシラバに出、思はず尻を下ろし、ここから見える裏金北の雄渾さを稱へつつ此處に天狗の休み場の名を與へた。富士山にも天狗の御庭があり他山にも例があ

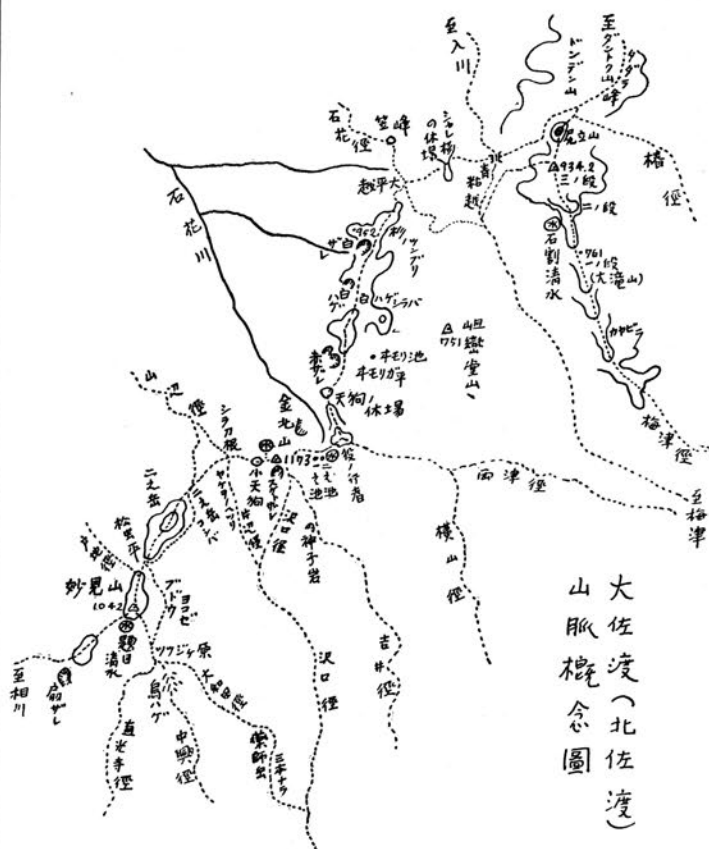
るが天狗様はかかる明朗なるシラバでは一ト休みしない筈はない。内地の田代が草田代に移した場合は岳人間からは山の神の遊び場、又は天狗の角力取場と云はれてゐるのも、その牧歌的地形から自づと湧き出た通念である。

これから又ボサくぐりでバツサしいシラバに歓聲をあげ、ザレバのトラパスにアルペンの氣分を味はひ放牛尾振り鳴き群れあそぶ

牛モリガ平の廣々したシラバに出る。下方に牛モリ池があるが、この牛モリは山椒魚であつて妙見の題目清水にも見られた。奥日光の鬼怒沼濕原に浮ぶ池諸の數六十二、一縷の塵を浮べず、一隻の魚も生じないが螺螺沼のみに數頭の牛モリを生ずといふのもこの山椒魚のことである。

なぞといふ歌が頭に湧いて仕舞ふ。愈々赤ザレでこれはやはり赤ザレと呼び頂を赤ザレの頭とした。この頭もシラバに成つて居り、次が白ハゲであるが、白ハゲの手前が石花川源流の廣いシラバで切明けに日本海の蒼茫と見える所。ここでものびて白ハゲシラバと命名、ザレの大登りで白ハゲの頭より又も灌木くぐりとシラバの出現とザレバの連續で、行手に最後の大ザレである白ザレがある。

大佐渡（北佐渡） 山脈概略圖



あまり赤ザレ白ハゲと續いたし、ここには杉のツンプリ（ツンプリはビークの俚言）が突元と目立つ所なので白ザレは止めて杉のツンプリとした。ここをすぎて大平越え（又は石花越え）のシラバに出た。この刀根も重要な十字路で石花徑に當り突元と笠の如くスッテンベン（頂上

の俚言）のとがった特異の高峰が見えて印象的なので笠峰とした。笠が嶽の如く巨きくもなく、笠山の如く柔しくもなく、何うしても笠峰である。笠峰にも登高欲をそそられつつ、これより東へ青粘越えへ二軒の灌木くぐりで、これも相當かぶつてゐるので、再びはり乍ら（切り拂ふの意）前進を續ける私には、又もみぎひだり灌木倒し行きあれば敵兵倒す思ひこそ湧け

かかる誤りが多々あり、そのため素養のない岳人を誤ることが尠くない。これからドンデンの大登り、途中から「ヤホー」の聲、それはわが金北山になくはならない三日に一度は金北山へ登つて金北山とは友達やうに成つてゐるといふ昨夕別れた山城さんの出迎への呼び聲で私達も「ヤホー」と應じる。ドンデン山にはドンデン池があり絶好のキャンプサイトだが、ドンデンの意味は皆にきいても不明であつたから研究してみる。（デンは天、即ち山頂の意か。）放牛放馬群れあそぶこの世ならの山上の樂園で、これから尻立山（尻を立てる、起きる、の意。その意味はこのあたり高原一帯は濃霧のときは困難する山地であるからいつまで尻を落ちつけてゐるの戒めの意味がこめられてゐる）三ノ段、二ノ段、一ノ段（大瀧山）にかけてタダラ峰高原と呼ぶ壯大なシラバで、上信の神津牧場や、日光の霧降牧場を更に大きくしたやうな大斜面の丘陵つづきで、佐渡汽船ではここへヒュッテをつくる案があり、わざ／＼ここへくる丈でも佐渡を訪れる価値ありと思はれた。タダラの意味も不明であるから調査してみる。（段々の意味と思ふが）これから兩津灣や加茂湖を

見下ろし乍ら下るシラバの雄大さ振り返る金剛山の岩峰のすばらしさ、恣なる風は見遙かす青一色の海からの爽かな風で、雲海の上に浮き出た金北山の高いのに驚嘆の聲を放ち合ひつつ、二日の間にスツカリ小麦色に染め上つた己がこの腕の色も心地よく、佐渡の山によさ、来てよかつたとの満足感に浸りつつ得意の直滑降（一直線にフルスピードで下ること）で下りに下つて行つた。

尙、金北山は昔北山と云はれてゐたもので、南佐渡に對する北佐渡の雄峰であるからこの名があつたと思ふ。現に山上で年老いた古老が北山と明らかに發音してをり、私もその方が感じが出るので「北山々々」と呼んでゐた。金の字が冠されたのは金山に因由してゐて、大久保長安が「佐渡の金山この世の地獄ヨ」のおけさ節の唄にある相川の金山初め島内五十數箇所（鐵脈試掘場）を設けるやうになつた當時からであるといはれてゐる。

又この北佐渡山脈縦走以上のアルパイトの縦走として、ぜひ復活して欲しいのは金北山、金剛山、檜特山の三山がけ（三山まいり）と題稱してゐる。で、幸今回下山後兩津町本間旅館で朝日新聞相川通信部主催で佐渡山岳會幹事近藤福

雄、又今回行を共にした同會小菅任助、佐々木勇、山城九平氏等と金北山座談會を催したが（朝日新聞新潟版八月二十二日號參照）、何れも山に鍛へられ育くまれた感のする眞摯純朴の山岳人のみで、四季を通じ佐渡の山々に登つてをり、石楠花初め珍奇高山植物を保護してをり、眞に山を愛し、山に愛されてゐる人々であつたことが心強く、何よりも慰さめられた嬉し

會員一千名突破に就て 報告とお願ひ

八月二十四日の本會々員總數は九百九十七名でありましたが、二十六日一時に十名の新會員を迎へ茲に待望の一千名を突破して一千七名となりました。其後引續き増加を續けて九月十六日現在で一千五十名に達しました。昨年末に於ける會員實數は八百七十名程でありましたから僅々八ヶ月半の間に百八十名程増加した譯であります。

最近十年間に會員の數は幾分増加して居りますもの一昨年迄は大體に於て新會員の増加數と、死

この寶の島へ歩を印し、内地でも珍しいシラバの發達した海風と放牛放馬のこの世の樂園佐渡の山々を歩いて貰ひたいと思ふ。私も亦来る年は三山まいりや、南佐渡の山々も歩くつもりである。シラバが未だ田代の状態である所は水薊が發達し、雪解と共に水芭蕉の咲くことや、モウセンゴケの葉の青いのも新しい發見であつたので、何れ民俗方面の考察やガスの發生し易い狀件と共に書いてみたいと思ふ。

× × × × ×

亡退會其他による減少數とがほぼ同數で、結局増しも減りもしないのが本會々員數の特徴と言はれて來たのであります。所が昨年は七十名程の新入會員に對し十名の減少で、一躍六十名程の差引増加となつたのであります。本年に到りましては九月半ば迄百八十名程の新入會員に對し未だ一名も退會者が不在の狀態であります。只今の所まだ入會申込者の數も相當にありますし、本年中に一千二百名内外に達する事も夢でないかも知れません。

かうした減る事のない確實な大増加といふ最近の傾向は何を物語るものでありませうか。それは元より、會を愛される熱心な會員諸氏の努力によつてである事は言ふ迄もありませんが、如何に會員に熱意があつた所で入會希望者がなかつたら、言ひ換へれば本會に人をひきつける魅力がなかつたら、どうしてこんなに會員が増しませうか。これを考へますと本會の責任は愈々重く愈々大きくなつたと言はねばなりません。

× × × × ×

右に述べました會員の増加數は、本年一月以來の數であります。が、この七月、會員各位に對し新會員推薦方をお願いしてから後はどんな事になつてゐるかと思ひますと、一名以上を推薦下さつた會員の數は五十名餘り、推薦によつて新しく會員となつた方が百名足らずといふ現狀でありまして、必ずしも多いとは申しませんが、會員各位の中には條々と推薦すべき人物を物色して居られる方も多し事と信じ大いに期待してゐる次第であります。本會々員として適はしい人物は一人も見逃さず推薦下さるやう此處に重ねて全會員各位にお願ひ申し上げます。

高山深谷 畫・隨筆內容

「高山深谷」第十輯は百枚の寫眞と解説の外に左のやうな素描と隨筆が收載されます。御期待下さい。

畫

山 籙……………中村清太郎
長次郎像（黒部溪谷にて）

ヒマラヤに咲く花……………石井鶴三
雪 溪……………茨木猪之吉

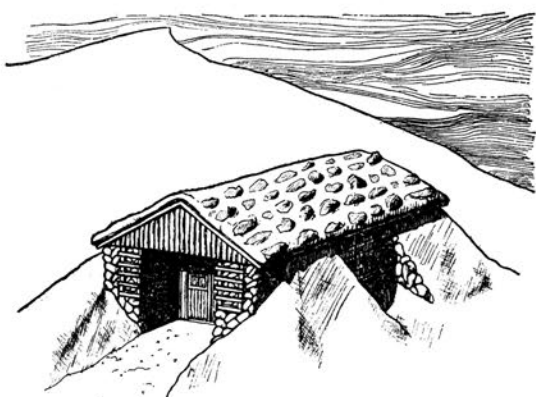
雲龍峽黒岩の瀑……………足立源一郎
白 樺……………古田 彰

野 宿……………木暮理太郎
一人旅・二人旅・三人の旅

溪の話……………冠 松次郎
山の池沼……………深田久彌

山・親心子心……………塚本繁松
歸 來……………尾崎喜八

尙刊行が後れて申譯ありませんが十月中には必ずお目にかけられるものと存じます。定價は七圓五十錢です。限定版ですから出版された後では入手が困難となる場合もありますから御希望の方は至急本會へ申込み下さい。一割引で上げする豫定です。



谷川岳避難 小屋竣工

谷川岳避難小屋は、材料不足、天候不順等の爲豫定より後れて八月十日大體竣工、八月十七日その竣工式が現場に於て行はれた。本會の角田吉夫氏都合悪き爲會長代理として私が出席し祝辭を讀む事となつた。當日は谷川岳こそ霧の中にあつたが、中部地方一帯は颱風一過後の快晴で、日曜でもあり一般登山者の數も數百名と數へられ中々賑やかであつた。式の最中一の倉の岩場で墜落し足を骨折した者のある事が報ぜられ、幾分式場もさわつたが式終了して救援

隊が現場へ向つた。その後で佛式による避難者供養が行はれ、終つて下山した。當日感じた事は、出来上つたばかりの屋根が雨洩りするのだといふのにもその責任は誰にあるのかも判然せず、修理するにしても誰が命令するのかその責任者もはつきりしてゐないといふ様子で、何となく所有主のないう小屋といつたやうな便りない感じがした。いふ迄もなくこの小屋は多數の人々の寄附による淨財によつて出来たものであり、所有者は水上村、管理者は水上山岳會と定つた以上、右に述べたやうな主人のない家といふ感じを今後抱かせないやうにしてもらひたいと切望する次第である。

この小屋は五月から十月末迄六ヶ月間番人常任する事になつたさうで甚だ結構であるが、問題はその經營方法である。水上山岳會では小屋番人に對し一切給料等は支給せず、休憩料、宿泊料等の収入を以て番人の生活費にあてる事に決定したさうであるが、それではどうしても營利小屋臭くなつていけないのではないかと思はれる。その點大いに考慮を願ひたいと思ふ。今一つ重要な點で問題と思ふのは、番人不在の十一月から四月末迄は小屋を閉鎖し施錠するとの事であるが、それは管理上小屋の保存上安全としても、それでは避難小屋の意味がなくなるのではないか。戸が開かない爲に小屋の前で倒れ死亡する人でも出来たらそれこそ大問題となるであらう。もつとも閉鎖中は鍵を貸したりリーダーのある隊には鍵を貸すとのことであるが、避難はさうした確かりした隊に起る事が少なく、確かりしない者に起り勝たぬのだから本末を顛倒したものと思ふ。山小屋（避難小屋として造られたものは特に）には錠を掛けるべきものではないのではないか。この點も大いに考慮されたい。

水上山岳會の小屋使用規定は左の通りである。

谷川岳、肩ノ小屋管理使用規定

第一條「谷川岳肩ノ小屋」以下單に小屋と稱すは水上村有トシ小屋ノ維持保存ノ爲メ水上山岳會ヲ管理人ト定メ之ヲ管理セシム

第二條小屋番人常時置ク期間ハ毎年五月一日ヨリ十月三十一日迄ノ間トシソレ以外ノ期間ハ當分ノ間小屋ヲ閉鎖ス

第三條小屋ノ閉鎖期間中ハ管理人ニ於テ毎月一回小屋ノ巡視ヲナスモノトス

第四條小屋ノ維持費ニ充ツルタメ使用料トシテ左ノ額ヲ利用者ヨリ徴收スルモノトス

一、使用料一泊一人ニ付金壹圓也

一、休憩料一人一回ニ付金拾錢也

第五條小屋ニ日誌宿泊人名簿及休憩者名簿ヲ設ケ小屋番人ニ利用者ハ様式ニ隨ヒ必ズ記載ヲ爲スモノトス

第六條小屋閉鎖期間中ト雖モ指導者ヲ有スル登山團體ニハ小屋ノ使用ヲ許可ス（第七條略）

尙本會取次寄附金は會報に未發表の左記のものを加へ合計參百拾參圓に達して居りそれは郵便貯金としてあるが、近く全拂をして水上山岳會に引渡す豫定である。此機會に於て寄附者各位に厚く御禮申上げたい。尙詳しい會計報告は近く水上山岳會から寄附者各位に送られる筈である。（塚本繁松記）

一〇四號會報發表以後に到着した寄附金は左の二口である。

金五拾圓也前橋山岳會

金八圓也東京アルカウ會

*カットは瓜生正氏筆同小屋見取圖

小集會開催

十月三日（金）午後六時半
日本橋日本商工俱樂部

ボルネオジャングルの旅

駒野久徳氏

圖書紹介

「たつた一人の山」

（浦松佐美太郎氏著、昭和十六年六月、文藝春秋社、四六版三〇一頁、寫眞八葉、價一圓八十錢）

會員浦松氏の著書である。巻頭のウエッターホルン單獨行の「たつた一人の山」から巻尾の「山のあぶなさ」に至るまで長短二十篇の紀行と隨想とを収む。いづれも

既に何か刊行物に發表されたものと思はれるが、雜誌類を手にする習慣のない余にとつては、「山岳」

第廿五年第一號所載の「ドロミテの山旅」以外のものは全部初めて見参したのである。

齒切のいゝ、簡明直截なスキリした文章は、ちやうど著者と席を同じくして、その巧みな座談に魅せられるやうに、讀者をして



巻をおく能はざらしめる。

ウエッターホルン西山稜初登攀の記と傍註された「頂上へ」の一章は、スイス・アルプスに於て、日本人の残した貴重な記録のひとつとして永く記憶せらるべきものであり、著者も最も力を籠めてペンを執られたであらう。前年の夏に、松方君と同じ西山稜を志して成らず、翌年、やつと二年越しの思ひを遂げて、遠い日本へ歸つてゐた松方君に、山頂で乾盃をしたとある。著者のそのときの心境を想ふと、讀者も亦兩君のために盃を挙げたくなるやうである。

他の諸篇について一々書くまでもない。山登りを一つの藝と観ずる著者はその修業を説き、或はまた「岩登りの味」を談じ、或は山への「情熱」を語り、その間著者一流の辛辣味を交へて、讀むものゝ心を巧みにとらへてゆく。

本書を通讀して感ずるのは、書中とところ／＼に窺はれる著者の深い造詣と、廣い経験とから推して、まだ／＼書きたいこと、書くべきことは、いくらでもある、といふ餘裕の見えることである。精一杯でこの本が出来上つたといつた風のところが少しもない。

そこで、ひとつ望みを許されるならば、スイス・アルプスに廣い足跡をもつ著者に、身を入れた登

山紀行を書き下ろして欲しいといふことである。ヒマラヤもいゝ、しかし著者の言の如く、スイス・アルプスの山々は、細かく深い味はひを持つてゐる。それらの山の話を著者からききたいと思ふ。

本書に自序も跋文もないのは、著者のひと／＼なりを識るものにとつてはもとより、然らざる人々にも、やゝ物足りなく感ぜらるゝであらう。或は、原稿を取揃へた出版業者の居催が、本書刊行の最大要素をなしてゐるといふやうな事情があるのかも知れない。

用紙、装幀いづれも、聖戰第五年目の非常時日本をよく反映してゐる。

ともあれ、近年傑出する山岳文獻の中で、本書は一段高い地位に置かるべきものであり、山に心よせる人々の味讀に値ひするものであることに太鼓判を捺すと共に、「一度でいゝから會心の山登りをして見たい。これが私の念願である。」といふ著者が、山登りと同じやうに、更にペンを驅つて會心の書を上梓される日を楽しみに待つてゐるやう。

(藤島敏男)

「氷魂」を手にして

「氷魂」一巻を手にしたとき、過ぐる年の冬、日高山脈ベテガリの表層雪崩の犠牲となつて逝いた北

大スキー部の遭難を昨日の日のやうに歴然と憶ひ出し、その犠牲者の一人である戸倉源次郎君の在りし日の記念として、その父戸倉幸二氏が編著したものであることを知り、その亡き子を憶ふ後れし親の情がこの白く輝く清楚な書物となつて、今われ／＼の手に美しく緋かれたのであることを思ひ、その大部分が山の道五百首、追憶五百餘首の計畫千餘首の追悼歌集を成してゐて、それを默讀してゆくうちに、自分も亦同じ哀愁にいざなはれつゝ、死して歸らぬ子と思ふ親の情にあはれを感じると共に、斯くも人に哀しみを訴へ心ゆくまでうたひつくす心は、これは一つの菩提へ通じる念誦であり、哀しき心は洗ひ慰さめられ、亡き子へのよき手向歌であることを知つた。それは俗情に汚れし人の心を淨め忘れてゐた自己本来の心へ眼覺めさせた。

山の道左迄に好むと親どちの心も遂に折れにけらしな
山の道幾日に甞れ歸り來る兒等の壯心親も動きぬ
山の道命をからむ岩へすり漲る底つ岩ゆるぐ溪
山の道ラテルネ往けば歌ひ出で勇を鼓したる思出もあり
山の道亡き兒の跡をひたゆきて涙も汗と流れ去りぬる

(以上山の道より)

泣かじやなふりさけ見ればコイボクの蝶々しき胸に笑む兒ならしを
永遠に若き命を寂光の國に生くるや夢も通はず

山の兒を待ち暮しぬる歳をへて世に亡き今も待ちぞ續くる
命日の四度めぐりて今日端午高く登りし鯉の思出
山に死ぬ兒の骨拾ふ親となり煙の末の天仰ぎ哭く
太古より在りしが儘の如くにもコイボク溪の曉の駒鳥

(以上追憶より)

故厨川白村博士全集刊行當時、疲勞からか病床に休まれてゐた蝶子未亡人は「死んで行く人が一番いゝですね、後に残つたものは書いたものをまとめたり、後の整理に哀しみと闘つて生きて行かねばならないのですもの」と沁々述懐されたことがあつた。世に死んで行つた者のうへを偲び、遺稿集をまとめる例は少くない。又山に子を捧げた親の数も尠くないのであつた。されど又幽明境を異にする

である。

歌集「氷魂」札幌・戸倉幸二編著・非賣品 (川崎隆章)

組寫眞集

山と生活

寫眞募集豫告

右について本會報一〇七、一〇八號に豫告を出してありますが、秋山のシーズンを迎へ會員各位の力作製作の程希望致します。詳細については一〇七、一〇八號を御参照下さい。

「山岳」第三十六年一號

發行御通知

「山岳」の發行が意外に遅れまして申訳ありませんでしたが、福島逸見兩幹事の努力により茲に完成本會報と共に送りする事となりました。御高評の程お願い申し上げます。

又第二號も今年中にお届け出来るやうに引續き編輯にかゝつて居りますから何卒御諒承の程お願い致します。

圖書室開室時間

毎日 正午開室
月水金 午後八時迄
火木土 午後五時迄
精々御來室を御待ちして居ります。



★ 聲 の 員 會 ★

マチガ澤の海野氏の遭難に對する山田奈良雄氏の御意見を讀んで一言、一會員氏に代つて述べさせていただきます。

あの遭難の真相をはつきりさせるには海野氏自らの手を再び煩しうたい云ふ事、及びその間違つてゐたと云ふ點と拙劣な技術と云ふ點を海野氏の記述を追つて一會員氏の手を煩はしたい事、此二つは山田氏の云はれる通り遭難防止にも役立つし我が登山界にも必要な事と思ひますので、兩氏に敢て御願ひしたいものです。

只山田氏がどの程度の登山家か存じませんが雪洞技術はあの時の新聞のみによる判断ですが一流の登山家の有する技術とは思はれな

かつた事、特に屢々雪洞生活を經驗されてゐる方は同感と思ひます。山田氏がこの點に疑問を持たれるのだつたら御自分でもう少し積雪期登攀技術の御研究をされた方がこの問題を更に簡単に諒解される早道と存じます。暴言失禮しました。山岳會も一言あつて然るべきではないでせうか。KS生編輯者曰く、この問題については各方面の意見を求め責任ある結果をつけたい考へます。

會員通信

赴戰山莊(朝鮮)より

奥野正彦

七月二十日、小雨に煙る赴戰湖を渡つて山莊に着きました。庭先にキノコウバイが一杯咲き誇つて静かな湖の夕暮は人工湖と思へぬ程でした。二十一日源水峯から遮日峯に登頂、之を越した尾根の下でビバークをして翌二日、北水白山へ立ち、同日夕刻往路を辿つて山莊へ歸着致しました。北鮮の山特有の廣い尾根にはウスニキサウヤクモマリンドウが咲亂れて居て、その美しさに疲れも覺えぬ程でした。二日間共お天気に恵まれ

山の幸を満悦、待望のオホアカボシウスバテフも我手で捕へる事が出来、すっかり喜んで居ります。明日は下山致します。

九州鳩信

月原生

◇迅く覺めて小鳥は峽の空渡る
杓柄
杓火燃ゆ静けき夜の霧重し
月原

ながれ行くさざりに高く日の御旗
米田

七月十九日福岡歩聯北九州支部薄霧山に於ける合同幕營練成會の情操陶冶として課題せる俳句の一つ(出句八五句あり)。参加團體一〇、人員八三人、天幕一八張。量に於て必ずしも好成績ではないが、質的收穫甚大であつた。

◇八月二十二日 長崎長崎に馳せ長崎縣岳聯の實情を見る。又長崎山岳會、筑紫山岳會主催の厚生施設山小屋展と山岳資料展に出陳せる資料の展示援助を爲す。

◇八月二十八日福岡縣山岳聯合會々々長安川第五郎氏決定す。氏は翼賛會理事、八幡市商工會議所副會頭其他三十有餘の諸種會長の重席にあり、吾等のもつとも快哉なるは、日本山岳聯盟長湯澤氏とは體協、翼賛會にて知友の間柄であることである。

◇二十八日の北九州支部役員會にて左の計畫を決定した。

◇二十六日阿蘇の岩場、高岳北尾根ツベツキ谷にて五高中生二回目のアクシデント惹起す。今年九州に於て三人目を出す。遺憾也。

北ア便り

跡部昌三

親戚の子二人にせがまれて、十七日から三日間、久し振りに北ア入りをしました。燕から槍、上高地の所謂銀座コースでしたが、近來夏の北アにはすっかり御無沙汰してゐたので、なつかしく歩いて

来ました。併し、きまりきつたコースをいい氣になつて歩くのも勿體ないと思つて、シュラフと乾パンのみで小屋を敬遠し、モトをとつてみる事にしました。幸ひお天氣が續いて氣樂にそれを遂行することが出来ました。

食糧は乾パン以外には全然持参せず、同行者のものにも手を出さぬことにしました。燕山莊に二人をほうり込んでおいて、夜空に星を數へてゐればいいのですから、小屋で蒲團一枚に三人ならんで、時には押しあひ、寢言を聞かされ、蚤に攻められる事から見れば、どれ位極楽だか知れません。

然し、此處では水を買はねば乾パンが咽喉を通つてくれません。水筒一杯に十銭を出して買つた譯です。けれど茲に一言したいことは、私が以前この小屋に泊つて出發するとき、水筒を出して金を請求され、その後何かにこの事を指摘したと記憶してゐます。現在でも宿泊者に水筒の水代を別にとつてゐます。要領のいい人は朝食時

に茶をせつせと水筒につめてゐます。又入口横の天水受けの水を汲んでゐる人もあります。何も知らぬ人が水筒を出して十銭をとられてゐるのです。

今度の私の如き、小屋泊りせぬものは水を買ふのは常り前で、曾つて此處で天幕を張つた人がバケツに一杯の水に一圓いくらを拂つた事を別に不思議とは思ひませんが、いくら水の尊いところであつても、宿泊者に水代をとるのはどうかと思ひます。宿泊者が小屋を出る時に水筒に水を詰めてやるのが小屋主としての當然の處置ではないかと思ひます。強いて水代が必要なら宿泊料に加算しておいて氣よく水を持たしてやるべきではないでせうか。話は古いですが、太郎小屋が宿泊料の外に蒲團代を請求して、宿泊者からその不合理を攻められ、遂に一喝にあつて陳謝したといふ事を聞いてゐます。何だかこれと同じ類の様な氣がします。これは私だけの考へ方かも知れませんが。

併し、私のやうな者は小屋から見れば登山者でないかも知れません。殺生小屋では水の心配は必要ですが、久し振りの徳澤小屋にはいると、いきなり「年に一度は顔を見せるものだ」となつかしく言はれると、つい上り込んで、氣

がつくと素手では出られず、湯の底に小豆の三四十粒程並んでゐる「ゆで小豆」を親戚の子の分と共に三つ注文して、九十銭の處を一圓五十銭も出さねばならぬ醜態（今度の行の主旨よりして）を演じてしまひました。

上高地ではこの逆手で、なじみを幸に、あちらで茶をのみ、こちらで菓子を食べ、しまひには常さんの處で飯を饅腹ばれ、避暑地化した上高地に長居は無用、ボロを出さぬうちに退散するに限ると終バスで歸つてしまひました。

今度の費用を持參の乾パンから市電まで含め、名古屋からの一切合財を十圓で切りあげたいと思つてゐましたが、いい氣になつたら、松本で夕食に一すうまいものを食つたばかりに一圓九十九銭の脚を出してしまひました。 八・二五

會員田口一郎氏

本會元理事終身會員田口一郎氏（會員番號一三〇六番昭和六年四月入會）はスイスに滞在中急性肺炎の爲八月十四日急逝せられた。氏の本會の爲に盡された功績を思ひ、且志半ばにして異境に倒れられたるを痛惜し惜別の情に堪えず茲に本會は謹んで哀悼の意を捧げる次第である。尙本會は亡兄と共にスイス滞在中なる令弟本會々員

田口二郎氏に宛て左の如き弔電を發した。

日本山岳會は會員田口一郎氏の逝去を深く悼む。

田口一郎君を悼む

藤島敏男

去る八月十四日瑞西の首都ベルンの病院で田口君が急逝したとの報を受つた私は、この餘りに意外なのに呆然としてしまつた。病名は肺炎といふことである。令弟二郎君も傍にゐるのだし、手當に遺漏のある筈もない。全く運が悪かつたとししか考へられない。昭和十二年七月、父君に伴はれ渡英した兄弟はロンドンで勉學してゐたのだが、暇をこしらへては好きな山登りによく瑞西へ出掛けたものである。日本にゐるときからさうであつたが、いつも兄弟揃つて、傍の見る目にも羨ましいやうであつた。

昭和十四年の夏、英國から瑞西に渡つて、アルプスの山々を登りあるいてゐる間に、歐洲大戰の勃發で、英京へ戻れなくなり、瑞西に居るを餘儀なくされてしまつた。「ゆつくり戦争見物をしませう」などとも言つてよこしたが、或は遠い日本にゐる両親や友人を想つては、歸國したい心が、手紙の裏に潜んでゐたかもしれない。

今年の秋にでもなつたら、あの元氣な顔をヒョククリ吾々の前に現はして、アルペンの思出話や、日本の現状に就いての感想を、彼一流の口調で、ましく立て、吾々仲間を羨ましがりせたり、ハラハラさせたりするかと、心待ちにしてゐたのだが、いまはそれも空しい期待となつた。

いまだ書くまでもないが、短かい生涯を通じて、故人が最も情熱をそゝいだものは「山」であつた。甲南高校山岳部、東京帝大山岳部、日本山岳會の各時代に、故人が日本の登山界並びに山友達の間に遺こしたものは尠くない。本會の組織、事業などについても眞摯な意見を抱いてゐた故人に今後俟つところ多かつただけに、會としても同君の死は大きな損失といふべきである。

田口君は、その言ひ遺した望み通り、アイガーの麓、グリンデルワルドの墓地に葬られたとき、生タリーリッヂさんと同じやうに、生前最も愛した山々の懷に抱かれてゐるであらう。萬里を隔てた遠い祖國から、遙かにその冥福を祈る。



會務報告

八月常務役員會報告

八月七日午後七時於事務所開催
出席者 木暮、嶺、島山、木村、中司、津田、早川、塚本、委任 沼井、逸見、福島、村尾、青木、横山

議題

- 一、監事、幹事補充ノ件
- 二、黒田監事公務多忙ニヨル監事補充ハ當分行ハザル事トス
- 三、湯淺幹事公務多忙ニヨル補充ノ件ハ、富田健一氏ヲ幹事ノ代行者トシテ委嘱シ、並ニ關西支部代表者ヲモ願フコトトス
- 四、望月幹事ノ代行者トシテ吉坂隆正氏ニ委嘱シ會報編輯ヲ依頼スルコトトシ、ソノ交渉方塚本幹事ニ一任

一、諸編輯報告

山日記（早川幹事）順調ニ進行中、山岳 再校進行中ノ旨逸見幹事ヨリ電話ニテ報告アリタリ
會報（塚本幹事）八月號校正中ニテ二十日以前ニ出來ノ旨報告

告

高山深谷（塚本幹事）寫眞校正済、目下活字ノ部分校正中

一、關西講演映畫會ノ件（津田評議員）

講師派遣費用ハ本會ニテ支辨ノ事會場費其他ハ切符賣上金ニテ支辨シ得ルヤウ支部ニテ取計フ事

一、關西支部研究會々場費ノ件（津田評議員）

毎月開ク關西支部研究會々場費ハ本會研究調查費トシテ支辨スル事

一、十一月講演映畫會々場ノ件（塚本幹事）

日比谷公會堂ハ借手多數ニテ借用困難ノ旨報告アリ、尙、木暮會長ニ依頼シテ借用方交渉スルコトトスルモ、不可能ナル場合ハ他ニ變更スルコトトス

一、懸案ノ未決議題ハ翌月議スコトトス

一、九月ハ役員總會トシ十一月（木）開催ノ事

一、入會申込者詮衡、承認決定者二十八名（多數ニ付氏名略）

以上

終身會員ニ變更

伊藤恩(會員番號一二六五番昭和五年十二月入會)

昭和十六年度ヨリ終身會員ニ變更

代表者變更

浪速高等學校山岳スキー班

代表者 木村 壽夫

圖書基金寄贈

六口金參拾圓也

右 木暮理太郎氏

購入圖書

寺本婉雅著

西藏語文法 内外出版株式會社

◎圖書寄贈(關西支部)

今回本會關西支部ルーム備付の圖書充實の爲め著名山岳書執筆者宛て著者寄贈を乞ひたる處左記圖書各著者より寄贈さる。厚く御好意を謝す。(關西支部圖書係)

・登山家に必要な救急處置

・山の幸

・ハイカーの徑

・山の人達

・奥羽の名山

淺井 東一氏

深田 久彌氏

木藤精一郎氏

高橋文太郎氏

三田尾松太郎氏

・樹林の山旅 森本 次男氏

圖書寄贈

武田久吉編山と溪谷社發行

尾瀬と日光 右 川崎隆章氏

荒井 道太郎 譯作

山 朋文堂發行

右 荒井道太郎氏

堀 正之

長白山の林況調査 (滿洲帝國林野局)

竹内 亮

長白山(地理學第九卷 第二・三號別刷)

右 二冊 竹内 亮氏

有馬 洋 遺稿集 歩み(林知夫編)

葛西晴雄 有馬、葛西兩家

探本閣治著文化寫眞叢書

雪と關ふ人々 東亞書林刊

右 東亞書林

小笠原勇八著

立山・劍岳 三省堂發行

大日本道中明細圖明治十四年

日本アルカウ會編

山 岳 美

熊澤正夫著

上 高地

鳥居龍藏著

武藏野及其周圍

高畑棟材著

山を行く

松井幹雄著

大董薩連嶺

柳田國男著

郷土會記錄

百溪祿郎太著

祖 母 岳

外ニ五冊

右 木村 鐵吉氏

戸倉源次郎追憶歌集

氷 魂

右 戸倉 幸二氏

川崎隆章氏著

尾瀬と南會津の山 三省堂

右 川崎 隆章氏

受贈會報部雜誌

峯 嶺會 峯嶺十五號

聖山岳會 聖六號

熊本アルカウ會 會報七月

築地山岳會 堆石八月

名古屋山岳會 會報五八號

東京山岳會 三角點十五號

東京市山岳部 部報八日號

山鳩岳友會 山岳八月號

東京農大山岳部 遭難願末

芝浦マツダ山岳會 會報六月七月

東京アルカウ會 會報八月

筑紫山岳會 つくし十二號

東京雪嶺會 雪嶺三十二號

東京山ノ會 會報八月號

東京登歩溪流會 會報八月號

東京登行會 會報八月

東京野蛭會 會報八月

横濱山岳會 會報八月

大阪探騷俱樂部 白峰八月

明峯山岳會 M M C 八月

晴山ヤマノ會 八月號

山と溪谷社 山と溪谷六八號

臺灣山岳會 彙報八月

廣島山岳會 會報八月

關東旅行俱樂部 策路八月

日本雪嶺山岳會 雪嶺一二號

登山とスキー社 登山とスキー七

八月

日本厚生協會 厚生の日七、八

月

東京地學協會 地學雜誌七月

ジャパンツリストビニロー

リリスト七、八月

雪 嶺 社 雪嶺一七號

津峠の會 峠八月號

阪神山岳會 山幸八十五號

東京地學協會 地學雜誌八月

雁ハイキンググループ 雁七、八

月

熊本アルカウ會 會報八月

廣島山岳會 會報九月號

東京賀屋山岳部 部報九月號

聖山岳會 聖七號

白樺旅行會 白樺一一號

朋 文 堂 山小屋八月號九月號

明峯山岳會 M M C 十一年九號

講演と映畫の會

◇十一月二十九日(土)

◇軍人會館に於て開催

◇講師・映畫交渉中

